

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：33801

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K10390

研究課題名（和文）乳幼児期に発症した小児がん患児の療養を支える家族力支援モデルの開発

研究課題名（英文）Development of a family support model to support the treatment of children with cancer who developed the disease in infancy

研究代表者

横森 愛子（Yokomori, Aiko）

常葉大学・健康科学部・教授

研究者番号：90413210

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：乳幼児期に発症した小児がんの初回治療を受ける患児に対応する父親と母親の行動プロセスについて、M-GTA研究法により研究を行った。その結果、発病した患児を見舞う日常生活において家族の安定のために新たな家族役割を見出し遂行しており、家族の凝集性を高めていたことが明らかになった。そこには、わが子の発病という事態への前向きな認識と治すことへの夫婦間の意思疎通や身内へのサポート希求により得られた理解と協力、父親及び母親の社会的関係者への告知により得られた理解と協力が関与していた。さらに母親は、患児の成長発達を認識することにより、闘病中であっても健常児と同様に関わっていきたいと考えていたことがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究において、乳幼児期にわが子が小児がんを発症するという出来事に遭遇した父親と母親が、夫婦間の意思疎通と自ら周囲の他者と関り資源を得て新たな家族内の役割を遂行して患児を見舞う日常に適応していた。このことから、小児がんを発症して初回治療を受けるという過程においては、家族が問題に対処するときに家族の心理的距離を縮めて資源を内部で担保したほうが適応的であり、家族凝集性を高めると考えられた。小児がん患児の家族支援において、乳幼児期に小児がんを発症した患児の家族をシステムとして捉え、家族が問題に対処し適応できる力に目を向けた支援の重要性について示唆を得ることができた。

研究成果の概要（英文）：The behavioral process of fathers and mothers responding to their children undergoing initial treatment for childhood cancer that developed in infancy was studied using the M-GTA method. The results revealed that in their daily lives visiting their sick children, the fathers discovered and carried out new family roles for the sake of family stability, which increased family cohesion. This was related to a positive recognition of their child's illness, communication between spouses regarding their child's recovery, and understanding and cooperation gained through a desire for support from family members, as well as understanding and cooperation gained by informing social connections of the father and mother. Furthermore, it was found that by recognizing the growth and development of their sick children, the mothers wanted to continue to be involved with them in the same way as healthy children, even while they were fighting the disease.

研究分野：小児看護

キーワード：小児がん 父親 母親 家族

1. 研究開始当初の背景

研究者の先行研究で明らかになったことは、①我が子の小児がんの発病から治療を受け始めた頃の母親は、家族の支援の実感により家族との情緒的結びつきを深めることで、治療を受けていく力を生んでいたこと、②患児が1クール目の治療を終了する頃には、家族だけではなく社会と繋がることで得た支援が母親の力となっていたこと、であった。

家族が様々な問題に直面した際の対処と適応に関しては、オルソンの家族システム円環モデルを用いた研究で説明されている。家族をシステムとして捉えた時に、家族が問題に対処する力が強いのは、家族凝縮性（きづな）と家族適応力（かじとり）という2つの要素で決まるとしている。神戸震災後における社会調査結果では、震災直後と半年後の家族の復興感とストレスは、異なった家族システムのタイプで問題に対処し適応していたとしている。

このことから、家族が問題に対処する時に、家族の心理的距離を狭めて資源を内部で担保した方が適応的である段階と、ある程度外から資源が入ってきて、家族は中庸な「きづな」である方が適応的である段階とがあることに着眼した。

そこで、本研究では、乳幼児期に小児がんを発症した患児の家族をシステムとして捉え、家族が問題に対処し適応できる力を高める支援方策を開発する。家族凝縮性（きづな）と家族適応力（かじとり）の2つの要素が、どのようなバランスであると家族は対処し適応するのか。問題がもたらす家族への影響を理解して、この2つの要素を適応的に補充する支援方策を作成する。

2. 研究の目的

乳幼児期に発症した小児がん患児の療養を支える家族力を高める支援モデルを開発に向けて、(1)・(2)の目的で研究を実施した。また、(2)の研究の分析において母親の認識の変容に関する分析テーマを見出したため、さらに(3)の目的で研究を実施した。

- (1) 乳幼児期に小児がんを発症し初回治療を受ける患児に対応する父親の行動プロセスを明らかにする。
- (2) 乳幼児期に小児がんを発症し初回治療を受ける患児の治療に対応していくプロセスを明らかにする。
- (3) 母親が乳幼児期に小児がんを発症し治療を受けるわが子に対する認識の変容プロセスを明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 対象：A病院に通院する小児がん患児の父親6名。患児は乳幼児期に小児がんを発病し、初回治療を終了して現在状態が安定しており、父親も身体面・精神面で安定していて自己の体験を語る事が可能な方とした。父親の年代は、30歳代～40歳代であり、患児にきょうだいがいる家族は2家族、核家族が3人であった。データの収集方法：インタビュー開始前に患児の治療や年齢、初回治療の過程で父親が関わりをもった方などについてアンケートを実施後、半構造的インタビューを実施した。1人1時間程度で1回実施した。質問内容は、「子どもの発病から初回治療が終了するまでの過程で家族やその他の周囲の人々とどのような関りがあったのか、その過程でのご自身の心情や患児とどのように関わっていったのか」についてであった。修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析をおこなった。

(2)対象：A病院に通院する小児がん患児の母親14名。患児は乳幼児期に小児がんを発病し、初回治療を終了して現在状態が安定しており、母親も身体面・精神面で安定して自己の体験を語る事が可能な方とした。母親の年代は、30歳代～40歳代であり、患児にきょうだいがいる家族は12家族、核家族が2人であった。データの収集方法：インタビュー開始前に患児の治療や年齢、初回治療の過程で母親が関わりをもった方などについてアンケートを実施後、半構造的インタビューを実施した。1人1時間程度で1回実施した。質問内容は、「子どもの発病から初回治療が終了するまでの過程で家族やその他の周囲の人々とどのような関りがあったのか、その過程でのご自身の心情や患児とどのように関わっていったのか」についてであった。修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析を行った。

(3)対象・データの収集方法は、(2)と同様である。

4. 研究成果

以下の文中の、【 】：カテゴリー、『 』：サブカテゴリー、「 」：概念を示す。

(1)結果の全体像であるストーリーラインを述べる。父親は、我が子の病名に死を想定し『発病の衝撃』を受け、これまでの自分の行動と関連づけることや、偶発的な出来事であると考え『発病の意味づけ』をしている。そのような不安定な気持ちの最中に治療は開始されていく。父親は、『医療者の言葉がけ』から我が子を任せられる治療環境にあると安心したことや、医師からの丁寧な治療の説明に信頼を抱き、『治療を受け入れるしかない』と考える。職場や身内からの『後ろ盾』、治療を頑張る『我が子からのパワー』、『子どもを支える母親のパワー』を力添えとして『我が子の命を守る伴走者』としての行動をとっていく。そして我が子は『治ると信じる』ことで自らをエンパワメントしていく。この『我が子の命を守る伴走者』というカテゴリーは、本研究で明らかにする父親の行動のプロセスにおけるコアカテゴリーと捉えた。考察：本研究のコアカテゴリーとして捉えた『我が子の命を守る伴走者』は、「夫婦二人三脚のパワー発動」、「親である自分のパワー全開」といった概念が包含されている。父親は、我が子の発病により、妻とのコミュニケーションを持ち、妻の母親としての頑張りを認め、お互いが我が子の命を守るためにできること実践しており、家族として患児を支える行動を見出していた。このことから、家族に視点をあてた支援の重要性が示唆された。

(2)全体のストーリーラインを述べる。母親は、「診断への不安と希望」を抱くが、「混乱の中で治療のルールにのる」。【医療者への信託】と「治るの言霊で落ち着く」ことで、「覚悟を決めて治療に向かう」ようになる。辛い状況を『夫婦で分かち合う』ことや『家族の生活の変化と維持』により【親力のチャージ】をし、わが子の治療に対応していく。さらに、「見通しがつくピアとの交流」によりわが子の治療の先を考えられるようになり、親としてわが子を見守る【第一人者としてサポートする】関わりをするようになる。『家族の生活の変化と維持』は、「身内による母親役割の補完」という概念を包含していたが、対極概念として「身内を距離を置く」という概念が見出された。考察：【親力のチャージ】というカテゴリーを生成しているのは、2つのサブカテゴリーであった。そのひとつは、「(夫に)辛さをキャッチしてもらう」ことや「(夫婦で)相互にエールを送る」という『夫婦で分かち合う』が見出された。このことから、親という立場で夫と妻のサブシステムが凝集する様相が明らかとなった。また、もうひとつのサブカテゴリーは『家族の生活の変化と維持』であり、「身内による母親役割の補完」と「きょうだいへの気遣い」を包含していた。このことから、患児を見舞うために毎日面会に行くという新たな日常において、家族全員員の生活の安定のためには身内の協力という社会的資源が関わっている一方で、日頃身内と良好な関係でない場合は距離を置くことで家族の生活を安定化させている状況もある

ことがわかった。

(3)全体のストーリーラインを述べる。母親は、元気で成長するはずのわが子の【予想外の発病と入院】によって混乱するが、医療者に【子どもを任せられる】と思えることで入院を受け入れる。入院治療が始まり、わが子を【つらい治療を受けるかわいそうな子】ととらえて、自分もつらい気持ちになるが、夫やピアや医療従事者から【つらさを逃がす】支援を受けていた。治療が進行し、ピアの存在や医療者の言葉を通して【視野の広がり】や【わが子の成長を感じる】ことで、我が子は【つらい治療を頑張る子】であると認識するようになり、【子どもの頑張りを支える】という認識に変容していた。【考察】ピアとの交流や医療従事者の言動が我が子の認識の変容に影響を与えていた。医療従事者は、治療を受ける子どもの母親自身のつらさにも目を向けて声をかけることや、母親が我が子の成長を認識できる関りを行うことにより、母親が子どもの力を高める支援者になるという示唆を得ることができた。

(1)～(3)の研究により、父親と母親が治療を受けるわが子に対応していくプロセスにおいて、誰とどのような相互作用により行動していくのかが明らかになった。本研究における「家族力」の定義は、「患児の療養過程に遭遇する諸問題を、家族間で相互に認識し合い、家族で問題に対処する力」であるが、父親も母親も、親役割という同じ立場に立つことで夫婦というサブシステムの凝集性が高まり、医療者や身内という社会的資源を能動的に活用しながら家族システムの凝集性を高めていると考えられた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 浅川和美, 横森愛子, 依田純子, 加藤由香
2. 発表標題 乳幼児期に小児がんを発症した子どもの母親がわが子の認識を変容するプロセス
3. 学会等名 日本看護科学学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 ASAKAWA KAZUMI, YOKOMORI AIKO, YODA JUNKO, KATOU YUKA
2. 発表標題 Coping process of mothers of patients who developed cancer in infancy and early childhood
3. 学会等名 International Research Conference of World Academy of Nursing Science (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 横森愛子, 浅川和美, 依田純子, 加藤由香
2. 発表標題 乳幼児期に小児がんを発症し初回治療を受ける患児に対する父親の行動プロセス
3. 学会等名 第39回日本看護科学学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kazumi Asakawa, Aiko Yokomori, Junko Yoda, Yuka Kato
2. 発表標題 Behavioral process of mother of children who develop childhood cancer and receive initial treatment in early childhood
3. 学会等名 The 6th international Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	依田 純子 (Yoda Junko) (60279908)	山梨県立大学・看護学部・准教授 (23503)	
研究分担者	浅川 和美 (Asakawa Kazumi) (60283199)	山梨大学・大学院総合研究部・教授 (13501)	
研究分担者	加藤 由香 (Kato Yuka) (60835742)	地方独立行政法人静岡県立病院機構静岡県立こども病院（臨床研究室）・臨床研究室・がん化学療法看護係長 (83809)	
研究分担者	大島 智恵 (Oosima Tomoe) (10345720)	山梨大学・大学院総合研究部・助教 (13501)	
研究分担者	安藤 晴美 (Amdo Harumi) (20377493)	山梨大学・大学院総合研究部・講師 (13501)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------